

G・H・Q 裏話 (6・4・16)

山本 義彦 (昭17・3理甲)

只今、ご紹介頂きました山本でございます。突然、井垣さんから大阪支部の野嶋さんを通して、何か喋れという命令がありまして、そんな柄ではないという風に断りましたら、もう、そういう年齢やというのと、いろんなことやってるやないかと、だから喋れということでした。考えましたら、今迄に立派なことを喋った方が沢山居られるので、そろそろ落ちこぼれも一度位喋らそうと、そういう意味ではないかなあと想着まして、ご命令を承知したわけです。私、喋れと言われた時に、何を喋るのかと考えましたら、一応、三つのどれかが皆様のご存じないことではないかと。

一つは、終戦直後のG・H・Qの経験、二つは麻薬。日米麻薬会議のメンバーでもありましたし、本にもなっておりますので、その話をするか、三つ目は、ここ十年、阪大の医学部の公衆衛生学教室で私が調べておった食中毒、特に、天然物の中毒ということで、フグとキノコの中毒。

皆さんにご興味あるのは、ひょっとしたら、フグではないかと思っただけですが、まだ、まとまっておられません。その中、古い話ですけど、終戦後の、G・H・Qに、内部におった日本人の見方というか、余り、本にはなっていないところを、少しお話するのは、皆様のような戦中派が大勢いらっしやる所では、興味あるテーマではないかなと思ひまして、少し、お喋りさせて頂きます。

私の専門分野が、衛生関係なものですから、阪大の医学部で、既に「占領時の衛生行政」という題で、講演させられました。それを聞いて、NHKの記者が私の家へ来まして、NHK企画の「敗戦直後の日本の実情」という特集に協力してくれということでしたが、まだ、差し障りあることが一杯あるのでというて、断ったのが数年前であります。そういうことで、こういう題を選びまして頂きました。表向きのG・H・Q 占領下の日本については沢山の本が出ております。一番、簡にして要を得ているのは、岩波新書のGHQという本であります。私の分野につきましては、DDT革命という名前の、上下二冊の膨大な本が、サムス大佐（後で、准将）の回顧録みたいなので出ております。既に、読まれていると思いますが、そのうちでは割合に公平と思うのは「日本占領革命」（副題GHQからの証言）というのがあります。これは、当時のG・H・Qの労働課長をしておったコーエンが、占領期五年、日本で働き、その後二十三年間も日本におった人間の本です。歴史家である為に、非常に公平というか客観的な本で、この二冊と私の分野に

(1946年8月26日現在)



ついでにDDT革命というて、占領下の衛生行政の実態を書いたものとの三冊位が、割合に、まともな本じゃないかと思ひます。

私は、落ちこぼれのと申しましたけれども、本当に、とんでもないコースを通っている人間でございまして、それじゃ、なぜ、G・H・Qみたいな所へ行つたんかということを簡単に申し上げます。一応、レジメみたいなのをお渡ししてありますので、それに従つてお話ししたいと思います。皆さんは、G・H・Qといいますと、日比谷の第一生命ビルを思い浮かべられると思いますが、実は、G・H・Qは、最初は東大であつたわけです。敗戦直後に東大が、即座に占領軍によつて全部封鎖の紙を貼られまして、一週間余り。しかし当時の文部大臣安部能成さんがマッカーサーに直接かけ合つて、日本の教育を無視したら、アメリカ人の程度を疑われ、バカにされるということで、どなり込んで、一挙に解除になつた訳。私らは、もし、乗り込んで来たら、私らが合成した毒ガスをやってやるというて、毒ガスを用意しておきまして、待ちかまえておつたんですが、とうとう来なくて解除になりました。そんな所へ、なんで行つたかと言ひますと、私の卒業直後、まだ敗戦直後ですから、外地から立派な人が引き揚げてもおりませんし、人が足りませんので、いくらでも職がありました。しかし先生の紹介してくれる職を全部断わり、郷里の田舎へ帰るつもりでいたところ、教授から話がありまして、占領軍の司令部で、医学や薬学がわかつて、英語しゃべれる人間を寄せと言つてるので、君行つてくれんかと、こういう話だったんで

す。

当時、大学は、ガスも水道も出ませんし、実験どころのさわぎじゃないという状態でしたから、こういうチャンスに、ちょっと位、英語を上手になつた方が、今後の為にもいいかもわからんということ、ハイ、行きます、と言うて行つたんです。それが先生の話と違っていました。それは、どういう所かと申しますと、二番目に書いてあります、U S S R、United States Strategic Bombing Survey といひまして、米国戦略爆撃調査団というものでありました。これは何をするかと言いますと、当然、戦中では、日本の爆撃の為の調査をやつてゐるわけですが、戦後は、爆撃の効果を調べて廻るというのが、どうやら目的でありました。それは、プリントの二枚目にあります、参謀部の第二部、G 2 という牒報部に關係がありまして、日本中の敗戦直後の状態を国民一般の口を通して調べて世論を調べる世論調査をやるといふ部門でありました。行つて見ますと、そこには、二世の有能な人が一杯おり、又、日本で宣教師をなさつた日本語の達者なアメリカの人達、それに外国から引上げた、食う為に一時そこで働こうという、非常に優秀な裁判官やら、弁護士の方が大勢おられました。巖本真理さんというバイオリニストのお父さんの巖本莊民氏（元アメリカ大使館）も一緒におつたんです。そういう所へ、放り込まれたんです。それで、二ヶ月余り、翻訳をしたわけです。これは占領直後に、二世の兵隊をばらまきまして、一般国民に、いくつかのアンケートの用紙を配り、答を書かせ、書けない人は、書き込んであげ

るという恰好で、調査をしたのを集めて来たわけです。

一番大事にしておったのは、日本国民は天皇をどう思うか、天皇制をどう思うかという風な調査であつた様です。それを書いた膨大な日本全体（北海道から九州にいたるまでの）のアンケートの日本語のものを、一日か二日で翻訳してくれということです。それで、各自タイプライターを提供されまして、日本語の文章を日本語見ながら、英文のタイプを叩いていったわけです。それが二ヶ月程で、さつと終つてしまいました。その結果、日本で天皇制をやっぱり護持した方が占領にプラスであろうと判断した様です。これは、都会よりも、むしろ田舎に重点をおいておつた様です。それで、もうすぐ辞めようと思つておつた訳です。事務所は宮城前の馬場先門にある明治生命ビルでした。ここで偶然、総司令部の中の、経済科学局（経済と財政、その他を担当する、日本でいうと、今の通産省とか、大蔵省を含めた様な部門）の長でありますマーカット少将に会いました。彼が我々の所に来てくれるかということで頼まれまして、それじゃ行きましょうということになり、辞めようと思つた所へトコトコ行きました。行つたのは、ESS Economic & Scientific Section と言ひまして、通産省、後の科学技術庁にあたる部門の科学技術課という所であります。その時に、私はちよつとESSをのぞいてみてやれ、という様な氣持で、他の部門の部屋にも出入りしました。他の部門には、ほとんど日本人はいませんでした。

次第にESSには独特の組織を持つているなということがわかつてきました。一番トップには、

必ず、アングロサクソンがおりました。つまり、課長にあたる人は、アングロサクソンです（例外もある様です）。そして、一番、えげつない、例えば、財閥解体を担当するアンチトラスト・カルテル・デイビジョンという風な所は、実際、一番きつい日本の会社を処分する部門ですから、ここは全部ユダヤ人を当てておりました。特に、戦争中、ひどい目にあつたユダヤ人をまわしておつた様です。だから、そういう連中とも知り合いになつた訳です。本職は、科学技術課という所で何やるんかと思つて入つていきますと、すでに日本人が約十人おりました。その時は、はじめは、わからなかつたんですが、よく聞いてみますと、日本のP Bレポート（これは、科学を専攻された方は、よくご存じと思いますが、ドイツが戦争中に達成した科学研究の成果を、勝つた方の連合軍の専門家が行つて、徹底的に文献を調べ、そして、それをまとめた膨大なもの）の日本版を作りたいと、どうも、そういうことであつた様であります。ですから、その方面の、いろんな専門家を入れておつたわけです。特に、生物学・化学・物理学という方面では、まあまあ第一級の日本の学者を入れておりました。残念ながら、医学・薬学系には、だれもいませんので、それで、来てくれと言われた意味が、やつとわかつたわけです。

その時のスタッフというのは、例えば、植物学ですと、シンガポールの植物園長をしておつた田中館秀三先生とか、生物学者の冲博士とか、あるいは、数学者の渡辺慧さんといつて、後で、アメリカの大学の教授に行つた方、天文学は、東大の天文学の大学院生が、これは二世で、バイ

リンガルの有能な人でしたけど、こんな人とか、という風に、部門毎に、いろんな人がおりまして、そこへ顧問格で理研の仁科芳雄先生が、週に一、二回、必ず来られまして、サジェスションをすると、そういう所であります。非常になごやかで、空気はよかったです。その時、スタッフにオーストラリヤとか、その他の連合国の学者が来ておったわけで、各国の学者同志の文獻の奪い合いがありました。驚いたことにアメリカから来ておった、ある大尉が毎朝出会いますと、手をこうやって、ハイルヒットラーと、大きな声でどなるのです。占領軍の、ど真中で、そんなことを毎朝どなっていたんで、私は、ちよっとおもしろいなと思って、そいつと、ちよっと、つっこんだ話をしだしたら、ドイツは負けたんじゃない、物資が足りなかっただけだ。日本は、本当に負けたんだと言って、何か日本をバカにしたので、喧嘩したんです。そういう、何か、いい加減な所あります。そういうことの為に、いろんな分野の人と会うことが出来たのは、まあ、プラスやと思いますけれども、感心したのは辞書の完備。日本のあらゆる部門の、船なら船、農林業なら農林業の専門の辞書が全部写真版で複製されており、三省堂や研究社の英和辞典等の大きなものは何千部という単位で（これは、戦争中に作ったんだそうですけれども）山積みになれておりました。

これは、膨大な量でありまして、聞いてみたら、全部戦争中に、日本のいろんなことを調べる為に作ったんだそうです。それが、後で、役に立ったわけです。私は英語しゃべれると言

って行っただんですが、チンブンカンブンであつたわけで、私は三高の英語で通じると思つてたのが、通じなかつたんで弱つたんですけども、やつぱり、三ヶ月、四ヶ月おりますと、畜生、この野郎と、喧嘩する文句までも英語でどなれるという状態になつたものですから、もう、いい加減に辞めようと思つておつた時に、今度はサムス大佐（後に准将）に出会いました。ちよつと言ひ忘れましたが、このESSの事務所は有楽町の駅を出て、今でもありますが、農林中央金庫ビル、このビル全体をESSが占拠しておりました。その隣に、GHQの本部の入つておつた第一生命ビルがございます。サムスなんかも始終出入りしておつたわけです。その時に偶然、サムスと話すチャンスがあつて、私は、こういうことで専門は、こういうことだと話したら、そういう人が欲しいんだ、マークット少将の了解を取るから来てくれんかということで、はじめ彼が居る第一生命ビルへ入つたわけです。

当時、第一生命ビルというのは、東京に焼け残つた建物の中では、一番、まともなビルだつたと思います、ここは、実は、皆さんご存知かと思ひますけども、第一生命が作つたビルじやございませんで、陸軍の予算で作つたビルであります。つまり、日本は、最後には、東京が戦場になるだろうというので、このビルは頑丈そのものに作つてありまして、上から直撃弾受けても、こわれない様な、そういう強度になっています。おまけに、ここの所は、ちよつと本当かうそかわからないんですが、関係者に聞くと、あのビルは、地下五階あつて、宮城と地下道で結ばれて

いること、それから、第一生命ビルから神奈川県の日吉、今の慶応大学がある所まで地下道が出ておって、まさかの時は、天皇は、宮城から第一生命へ来て、地下何階かにおられたら、絶対大丈夫だと。それでもダメな時には、地下を通って、日吉まで行く手筈。その地下道があるかないかは、私は、実は知りませんし、専らの話だったんですが、まだ、確かめたことございません。長野県の松代に、大本営の跡があるというのは知っておりますけれども、あれの東京版みたいなものが出来ておったという風に聞いております。

私は、第一生命ビルの一階にありました。皆様の会社へおいでになつてゐる人は、よくおわかりですが、日本の会社というのは、上の方に、えらい人がおつて、下の一階には、オープンでガラス張りで開けすけになっておると。そこは、下っぱの人がおることになつてゐるんですが、第一生命ビルもその通りでありまして、一階は、ずーとガラス張りで公衆衛生福祉局(Public Health Welfare Section)がありました。そのチーフがサムス大佐です。上の方へ行くと、個室が一杯ありまして、マッカーサーは、確か、五階か六階の所におつた様ですが、毎朝出会うんですけども、二、三回しか挨拶したことはないんです。とつとことつとこ一人で、副官も何にも連れないで毎朝出て来るのに、よく出会いました。そういうビルの中で幾つかの部門があつたんですけども、先程、言いました様に、東大はG・H・Qの第一の候補だったのは至る所に駐車場が出来るということと、ビルが沢山あるんで、いろんなものが全部入れる為でした。し

かしこの右側の表にあります様な、幕僚部の中のいろんな部門、天然資源局とか、経済科学局とか、あるいは民間情報教育局とか、全部入れないのです。それで、東大を断念した為に、第一生命ビルの近く、例えば、農林信用金庫ビル、明治生命ビル、東京海上ビル、NHKビル、三菱中何号館という風な所を十位、どれもこれも、G・H・Qのオフィスにしたわけです。駐車場は宮城前広場。そのうち、主要な部分は、日比谷の交差点にある第一生命ビルであつたわけです。で、そこへ入りました。入って見ると、日本人は、一人もおりませんで、毎朝、出て行つても、日本人は一人ですから、徹底的に身体検査をしよる。どうして、こんなに嚴重にするかと聞きましたら、いつ、ドスでやられるかわからんからと。こわいんですね。日本人がこわい、ピストル持つてないか、ドスを持つてないか、そんなの持つてゐるはずがないじゃないか、と言つても信用しない。と言うのも、アメリカの兵隊も将校も、占領後に毎日のように、例えば、上野とか浅草で殺されてたためです。日本の、ヤクザなんか、占領軍を襲い、ずい分殺された。私も、それを一部、目撃したことがあるんですが、上野の山なんかで、飛行機から取つてきた航空機関銃で、ヤクザ同志の出入りがあつたのを覚えておりますけども、そんな状態で、アメリカ兵なんか、随分、殺されてゐるわけです。占領後に。そういうことがあつて、非常に、こわがつておりました。こちらは、どうせ、一度、死んだ生命やからと言うんで、ヘッチャラなんですけども、向うが逆にこわがつていたという風な状態です。

そこへ入って、扱、仕事をやるのに僕の資格はどういうことですかと聞くと、Technical adviserであると。そういう仕事をしてくれという。よくわからなくて、後でわかったのですが、結局、日本の各省のうちの、この部門では、厚生省ですが、厚生省とG・H・Qの間に立って、まあ、コーディネーターみたいな、取りもち役をやってくれということの様です。ですから、通訳や翻訳じゃなくて、Technical adviserということですから、割合に、待遇がよくて、大事にしてくれました。この部門はどうしても、私の専門になるんですが（この辺は、阪大で、おしゃべりした公衆衛生行政ということになるんですけども）、余り細かなことを言っても専門に亘りますので省略します。その各スタッフというのは、一応、医療関係、獣医関係、栄養関係、麻薬関係、看護関係、それに、歯科医学関係という風な専門家が揃っております。ついでに申し上げますと、占領軍というよりも、連合軍で一番優秀な人材は、というと、いろいろ聞いてみますと、ヨーロッパ連合軍に、アメリカも第一級を送って、第二級の人間を太平洋陸軍司令部に送ってきた。それが、やはり、G・H・Qを形作ってるらしい。ということが、段々、わかってきました。けれども、中には、必ず、優秀な人がおりまして、最高顧問のヴォークというのは、研究者としては、相当、有名な人でありましたが、医学関係の大学なんかを統轄、指導しておったわけです。

私は割合に信用されておりました。何故信用されたか、と思いますと、最初に、あなたは、真

珠湾攻撃をどう思うかということ、行つた時に、まづ先に聞かれました。私は、あんな愉快なことなかったと、アメリカをやつつけて、せいせいしたこと、バンザイを言つたことだと大きな声で言うたわけです。それを他の部屋は個室ですけども、第一生命ビルの一階は、ワンフロアがワンルームになつておつて、ガラス張りで一つの部屋です。だから、各課長連中というのか、部門の長は、全部見渡せる所で、全部おるわけです。だから、そこで、大きな声を出せば、全部聞えるわけです。数十人いましたけれども。それで早速に、行つた日に仇名をつけられました、ミスター東条。大將は、ゼネラル東条というんですが、東条同様に、えらい右翼のすごい人間が来たというんで、仇名は、ミスター東条ということになり、ミスター東条と、よく呼ばれる様になりました、声かけてくれるのは、皆、ミスター東条であります。別に、東条大將を私は尊敬したわけやないんですけども、真珠湾攻撃を大賛成というんで、演説したものですからそういうことに。信用されたと言いますのは、それまで、日本人が来たら、皆、ペコペコして絶対に、アメリカの言うことにイエスしか言わない。それなのに、頭から反対に文句言つたヤツがおるというので、これはどうも、まともである、こいつの言うことは、どうやら信用出来ると思つたらしいですね。大佐連中が、何人も来て、握手しに来てくれまして、お前、いい事を言つた、というんですね。まあ、勝つた国だから、應揚なこと言えるんだらうと思うんですけども、案外、こん畜生と思うんじゃないくて、ええことを言うヤツがおる、という信用されたというのは、非常に

よかった様に思います。その中で、それこそ、アドバイザーという役を随分させられたので、一つの部門だけじゃなくて、あらゆる部門に、何かあったら一緒に行ってくれんか、とか何とか、かんとか、引っぱり出されました。

それで、例えば、麻薬の問題がありますと、麻薬の時には、これは、私の本職に近いですから詳しいわけですから、是非とも、日本人の人を尋問するのに、おってくれんかというて、やったわけです。その時に、一番おもしろかったのは、星 一さんというて、戦後、参議院か何かの最高点に当選された方ですが、星製薬の社長をしておった星さんが来て、彼は、英語が得意ですから、英語でまくし立てて、ものすごく喧嘩してるわけです。何やってるのかと思ってる聞いていると、戦争中に星製薬と武田薬品と、それから、三共製薬の三社が、陸軍の命令で麻薬を大量に作って、それを、海賊船でヤクザを雇って、全部陸軍の予算、機密費ですが、それでアメリカへ密輸出したようなわけです。そうすると、アメリカの方でも、ヤクザがちゃんとおりまして、それを受け取って、アメリカの一般の人に、その麻薬を、専ら、モルヒネですが、それをばらまいたと。向うも、ぼろ儲けしてるし、こちらのヤクザもぼろ儲けしてる。お金は、日ノ丸台所で陸軍省の金であると。そういう文書が見つかりまして、私、写真機持っていたら、撮ってくりゃよかったと思うんですが、極秘という文書が、陸軍省から出ておりました。何枚も見せられたんですが、麻薬をアメリカへ持って行ってくれという陸軍省の指示書が、ちゃんと残ってるわけです。

それ、どうしてみつけたんかわからないんですが、そういう文書を全部持って来まして、翻訳してくれとか、そういうことを言うたわけです。麻薬については、多少、我々の先輩なんか、麻薬を沢山持ってた為に、自殺に追い込まれたというのもありますし、いろいろありますが、戦争中に、アメリカへ日本が陸軍の指示によって、麻薬を密輸出しておったということは、余り知られてないんじゃないかと思います。

最初にやった仕事の一つが、東竜太郎先生、後の東京都知事になった東先生に、君、ちょっと手伝ってくれんかと言われたことです。当時、東先生は東大の教授と、厚生省の医務局長とを兼任しておられたと思うんですが、それで、厚生省の局長の立場でロックフェラーフェローを選ぶ時に手伝いました。その選考は全国の医学者の履歴が一杯集まっています、それを整理して、だれを送るかというのを三月ほどお手伝いをさせられたのは、印象深いわけです。この時に感心したのは、東先生というのは、ロンドンで鍛えた英語が、非常に上手で、一高時代から有名だったそうですけれども、アメリカ人が、キングスイングリッシュというのには弱いということを徹底的に利用されていたようで手も足も出ないわけですね、アメリカの専門家達は。ドクター東という風に、最敬礼して、東さんが入ってくると、皆、部長連中が、最敬礼するという状態が毎日々々続きました。何かあったら、東さんにまかし立てられるものですから、皆、しゅんとなつてしまったという風なので愉快だったわけです。

内部におりまして、いろいろよろずやをやらされたわけですが、割に印象に残っておりますのは、ミス・オールト、オールト少佐、メージャオールトとも、普通、言っておりますけれども、看護少佐のオールトさんというのは、非常に印象に残っております。この人は、日本の婦人の、同権運動のはしりみたいな指導をした人です。オールト少佐は医学の学位も持っている立派な人で、戦前、日本じゃなくて韓国の病院で婦長としておられた方で、それが、アメリカ人であるが為に、戦争中アメリカへ追い返された様な履歴の持主ですが、美人で非常に穏やかな人柄で、日本の看護婦さんの地位向上に随分貢献されました。現在、私も、折に、看護学校なんかで看護婦さんとか、婦長さんに会いますと、ミス・オールトを知っていると云うて話をすると、看護婦の世界では神様であると、祀って拝まないかん様な人であるということとで尊敬しています。彼女は看護婦制度を改革して地位の向上を計ることに最大の努力をされました。彼女はすばらしい方ですが、当時日本に出来ておりました婦人団体が、オールトさんを囲む会をやるのに通訳をやってくれんかと言われて、オールトさんに頼まれて、できたばかりの主婦と生活社主催で二十人ばかりの婦人団体と一緒に食事をしながら、座談会をやったことがあります。この間も、それについて問合せが東京から、医学史研究会の人からありました。主婦と生活社という雑誌の、初めの頃のバックナンバー見てくれたら載つてると返事しておいたんですが、これは非常に好評でありまして、穏やかな人柄と、女性の地位向上、特に、看護婦さんの地位向上に、随分頑張っておられた

ということが、印象に残っております。

その他、いろんな日本の側のことで、何か文句いえないかというのを、虎視眈々、狙ってた所へ、日本の研究機関が、接収されてるのを、何とかならんかという話が出ました。これは国立衛生試験所という機関で、世田谷の用賀にあるんですが、これは、占領後、間もなく、接収されました。非常に大事な研究所でありますけれども、この衛生試験所の接収を、何とか解除出来ないかというんで、私は、内部で、サムスに、こんな大事なものを接収をするとは、あなた達の信用を落とすんじゃないかということを言いました。それだけであかんから、当時の所長の松尾先生とか、副所長の大岡先生（私の大学時代の助教教授だった方で、三高の先輩）、このお二人の方に、外から公式に働きかけて下さい、内部は、私が工作するということを約束しまして、両方で同時にやりましたら、何と一日か二日で解除になりました。ものすごく喜ばれました。接収されてから一週間か十日で解除になった。だから衛生試験所というのは、当時のままの場所で、現在も立派にあります。その所長の努力と私の内部の努力が実ったということを松尾所長の回顧録に、私の名前が出てるぞというんで、聞いてみますと、接収を解除したことについての功績大であるという風に書いてくれるそうです。それは、唯一、なぐさめになったわけです。

当時、日本人として、私一人だったものですから、やっぱり翻訳通訳する人が足りないのです、少し、雇ってくれということをサムスに頼まれまして、私は、英語が下手くそなのに、何と、

図々しく、通訳や翻訳者の採用試験を致しました。一人で採用試験をやったわけですけども、来たのは、何と、津田塾を卒業した超ベテランの英語の上手な女性で、おまけに、個性の強い人が三人来まして、新聞を訳させたり、何かしましたら、とても、私が出来ない様なことをやるものですから、優秀であるというんで、三人とも採用するということたら、喜んで働き出したんです。残念ながら、三人ともアメリカ人のお嫁さんになってしまって、現在、日本におりません。そんなことで、段々、私の下手な英語で日本人を採用して、十人、十五人と増えたわけです。ところが見てますと、進駐軍を利用して何かしてるやつが一杯いるんです。それで、とうとう私も勘忍袋の緒が切れて、皆、集まってくれと言うて、翻訳や通訳をやってる人に集まってもらって、今までは軍閥、財閥でいじめられたが、もうちょっとしたら、進駐軍閥いうて、皆さん、後世の人から非難されることがきつとあると、皆、そういうことない様にだけしてくれと言うたら、怒りましてね。人のプライバシーまで文句いう、あんたはチーフか、と言うんで、いや、そうじゃない、日本人のプライドがあるやろと言うて、大演説をやったわけです。これは、何か、えらく物議をかもしまして、私をボイコットして、辞めさせようということが起こったわけです。だから、まあ、そういう演説をしたということは確かですけども、効果はわかりません。現実には、いろいろのことがございまして、内緒で、いろいろとやっていた様です。

特に、例えば、製薬会社のボスなんかは、きれいな女の子を伴って来て、そして、ちょっと

でも薬に関係のある医者とか、病院関係とかを連れ出して、どこかへ連れて行って接待するとう風なことを、始終やっておったんですが、アメリカ人だけではアカンから、私まで買収しようと思って、きれいな美人の娘を連れて来て、うちの娘をどうですか式のことも、誘惑が結構ありました。大分、引かなかった人もおるみたいですけども、私は、少なくともそれには引かかりませんでした、いろいろございました。その他、強姦で妊娠した婦人の訴えというのが、ちょっとございますけども、これは実は、本当にここだけの話でございますけれども、皆さん、よくご存知の通り、昭和二十年八月十九日に、進駐軍の兵隊の爲の売春婦の館を、大森海岸に作りまして、つまり、特攻隊を募集してですね。そして、一般の子女に迷惑を及ぼさない様にするというので作ったのは、記録に残っておりますけれども、そんな所じゃなくて、大森、蒲田、品川あたりの女性という女性、片っぱしから強姦されたというわけです。

これは、小学生から七・八十の年寄に至るまで、軒並みにやられたわけです。これは、占領直後の話です。これはひどいということで、しかし一週間だけ放つてあった様です。一週間経つとマッカーサーから、厳罰に処すると、殊によると死刑にするという風な、厳罰の命令が出まして、びしゃつとやんだんです。これは感心する程、見事に止みました。その代り、同時に、私が住んでおりました日本橋、蛸殻町、兜町の近くですけども、近くに変な建物がポコポコと出来てあるんですね。便所みたいなヤツが。見ますとProphylactic stationと書いてありました。予防所と

いうわけですね。つまり、女と遊んできた後の消毒所なんですね。そういう所へ、売春婦を買ったアメリカ兵が来て後、消毒して帰る所で二等兵が一人、しょぼんとして居るんですね。あなた、幾つと言うたら、十七とか何とか言うてました。こんなつまらん仕事はないと言う。皆、遊んできた後を洗いに来る。こんな場所で見張りしていると、こんなつまらん仕事はない。何とか早く国へ帰りたいと、そればかり言っておりました。けれども、そんなのを、沢山、一つの区に幾つかずつ、東京中さつと作ってしまひまして、そして、一人づつ、若い若い二等兵をつけておりまして、その二等兵が、消毒して帰るのを見てると、部屋を管理してただけなんですけれども、そういうことをさつとやった。この早さには驚いたんですが、先程、ここだけの話やといつて言いました、今の、太田区大森、蒲田、品川で、あの辺で、軒並、強姦されたという、その結果が、続々と出ました。黒人兵に強姦されて、お腹大きくなった、何とかしてくれ、というのが、G・H・Qの一階へ飛び込んで来るわけです。それで、私は、そんな係と違うんですけども、何とか言つて帰してやってくれと言われる。そうすると会わなしくないですね。日本人、他にいませんから。そうすると、泣いて、ワン／＼泣いて、何とかして欲しいと。堕したいんだけれども、と言うても、そんなことは指示出来ませんし、それで、結局は、泣いて、又、帰ると言うのが、毎日の様になりました。これは、本当に残酷な話で、黒人ばかりじゃなくて、白人の兵隊の子供も出ました。こういう子供達は、エリザベス・サンダースホームとか、そういう所へ引きとられて行

ったということを、後で聞きましたけれども、毎日の様に、泣いてG・H・Qを訪れる女の子がいました。

その次に、マッカーサー暗殺未遂事件というのが書いてありますが、これは、日本の新聞に勿論出ませんでしたけれども、私が第一生命ビルの中へ行ってから聞なしです。毎日、マッカーサーが出入りするのが見えておったわけですが、第一生命ビルの入口、玄関を入ったら、えらく今日は徹底的に靴の中まで調べる程の、身体検査をしておるんですね。一体どうしたんだと言うたら、先程、マッカーサー暗殺未遂があったとこや、と。これは、京城から引き上げた日本の警官が、大きな拳銃を持って、マッカーサーが第一生命ビルへ到着する直前に撃とうと思って待ち構えておったのを、捕ったと。そういう事件であります。多分、マッカーサーは全くの丸腰で、副官もだれも護衛なしに、毎日、アメリカ大使館から来ておりましたので、それをねらったんだろうと思うんですが、護衛は付いておりませんでしたけれども、まあ、どこかで見張るヤツがおったんだろうと思うんですが、ビルへ入る直前に捕まった様です。何でこんなに嚴重なことをやるのかと思ったら、今、つかまったところだということで、何かえらく緊張しておりました。私も仲間と間違えられそうになったので困ったんですけれども。それから、も一つ、プライベートなことにわたると思うんですが、先程言ったミスター東条といわれた真珠湾攻撃の演説をした後、何人か、将校と親しくなりましたけれども、そのうちの一人が、ドクター・ジョンソンです。こ

れは、アメリカの大学で内科の教授だったのが、日支事変から、ずっと戦争中、蒋介石に頼まれて、中国の医学の最高顧問になって、そして中国では、中將の位にあった人、これが医務課長の立場で、この部門におったわけです。

彼は、特に中国で長いし、アジアのこと、よく知っております。私、特に親しくなりまして、家族同様に扱われました。彼と、つい、いろんなことで相談受けたりしたわけですが、その時にちよつとおもしろいと思いましたのは家の接収です。初めは占領軍の高級將校達は、全部、帝国ホテルにおったわけです。帝国ホテルへ行っても、暖房も、みな金属は取り払われて、暖房もなくて、ネズミの巢みたいな帝国ホテルだったそうですが、そこで一年程我慢して、そして後、接収した大邸宅を上から順番に中將、少將、准將、大佐という風に割当てたんですね。上から順番に、いい所、取ってゆくわけです。ドクター・ジョンソンが相談にのってくれんかということ。この割当ての中から、一番良さそうな家を選ぶのに、ついて行ってくれんかということで、よつしやと行きますと、彼のキャデラックに山の様に弁当積んであるわけです。平日の弁当はレイションといまして、Aレイション、Bレイション、Cレイションといって、三段階の弁当があるんですが、これ、山の様に積んで一日がかりで、三十ヶ所、廻らんならんと。それを見てくれというわけです。一日では三十ヶ所廻れませんでね、幾ら車であっても。二、三日かかったと思いますが、そして廻ったところ、日本の、そこに書いてあります、豪邸が氾濫してると書いてある

んですが、東京のあの空襲が続いた後にもかかわらず、こんなに豪邸が一杯あったんかと、びっくり致しました。

三菱の豪邸は、本郷切通にありましたけれども、三井の本邸は、世田谷にありました。三井の本家なんかは、私もずっと中を見て来たんですが、それも接収の選ぶ中に入っておりまして、行ってみますと、一廻りするのに三十分位かかるわけですね、広くって。門から玄関まで百米位あって、池があり山があり、ボートが浮かんでいる、という様な豪邸が三井の本家でした。これは、広すぎると言うてやめたんですが、結局、三十数ヶ所見たうちで、案外わかったのは、陸軍大将、海軍大将の豪邸が多かったんですね。なんで陸軍や海軍の大将の豪邸が、こんなに豪邸なのかと思うと、何と奥さんが全部財閥の娘なんです。三井・三菱か住友か、その辺の財閥の娘を無理にもらわしてもらったんかどうか知りませんが、奥さんが皆、財閥で、例えば九段坂の所にあります、パインハウスという家がありますが、これは三階建の床暖房の立派な家ですが、これが何と上から下まで全部、一本の太い松の木で、それを製材した材料で出来てみると、そういうのから船会社の重役の家なんかは現在でも珍らしいと思います。船の恰好して、こう、丸い窓をつけた家全体が船という風な豪邸もいくつかありました。私は、結局、すすめて、接収を決定したのは、世々木上原町にあります、ある、やっぱり船関係の社長か何かの豪邸でありますけれども、そこで大げんかを一度しました。どうしてしたかと言いますと、靴で上ってゆくのでストップかけて、

靴ぬぎなさいということと言ったわけです。その後、も一つ、困ったことは、柱が、豪邸ですけれども、白木なんです。これを何色にぬるかペインティングすること。他の将校は皆、ペインティングするわけですね。接収した家屋をペインティングしてる。何色に塗ったら似合うだろうと言うから、日本の家屋のいい所は、何も塗らない、生地のままがいいんであって、そんなわからんようでは困るというて文句言ったわけです。やっと納得しまして、それから、畳の上も上らん様になるし、非常に理解を示したわけですけれども、困ったことに、その家で毎週カクテルパーティに頼まれて行っとったわけです。

むしろ、主催者側に立つこと多くって、その家でアメリカ人のドクター連中、大佐・中佐ばっかりを毎週の様を集めてパーティやっておりました。それはよかったです、その接収された家の奥さん、これは家が大きいですから、別棟があるわけですね。そこで家族が住んでるわけです、接収された家の。その奥さんが、夜な夜な、売春に出て来るわけです。来て困るというんですが、何とか言うてくれというわけです。とにかく、物が欲しくて。接収された大金持の奥さんが、身体売って、何かをもらおうと思って出て来ると。これは、他でも随分聞きました。私も、ちよつとなさけないということを思いましたんですが、こういう時になりますと、人間の本性で、ようわかるということを、つくづく思ったわけです。私自身は、まだ若かったわけですから、気楽な立場です。しかし、このコーエンの本を見ますと、労働課長をやった時は、まだ二十八にな

ってなかったんですね。そんな若い連中が、G・H・Qを牛耳ったわけです。G・H・Qの中は、共産主義者がうずまいておりました。

共産主義者が、ものすごい多数おりましたので、その連中と、随分、議論になったわけですけど、個人的に親しくなつて、弁証法でやり合うと、頼りない私の英語で *dialectic* 弁証法というので、一晩中、アメリカの将校と議論したこともございます。でも、議論した後、割合に、日本人とちがつて、案外親しくなるものでありまして、私自身が気楽な立場であつたせいもあるんですけれども、割合に言いたいことを言ってきた様な気がします。公衆衛生福祉局は第一生命ビルなんです、ドクター・ジョンソンと、ものすごく仲良くなったものですから、私の日本橋の下宿へ、毎日パッカードで迎えに来てくれ、帰りはそこへ送ってくれるという、当時の日本人では考えられん生活であります。それから、弁当、ヒル飯はレーション。海の中へほり込んでも、全然、水が入らない、腐らないというパラフィンで、こう、カバーした弁当。見られた方もあると思うんですが、あれを普通は一回に食なんですけども大抵三つか四つくれるんですね。どうして、こんなくれるんかと思いました。それから、タバコは毎日、私は、皆さんがゴールデンバットのオンボロを吸っておられた時分に、ラッキーストライクとかチェスターフィールドを毎日、六箱づつ、配給してもらいました。弁当といい、そんなたばこを山の様に、どうして配給するのかと思ひましたら、サイパン島で五年分程の物資を全部用意したんだそうです。サイパンをおと

してからです。それを、どうにもこうにも余って仕様がなから、皆に渡してんのや、ということ、ともかく、ええ、めんどくさい、ワンカートン宛あげることになりました。ともかく、たばこ余って／＼困って。その時からどうもヘビースモーカーになった様な気がします。

おもしろいことに、当時でも日本の労働者が掃除人として雇われておったんです。私は意識して、たばこを一口だけ吸うて、灰皿へ置いていくわけです。そうすると、掃除してる人は、その吸いがらを、全部回収して、それを巻きもどして、バラして、それで巻いて、街で売っておった様です。フランススキーというユダヤ人の麻薬取締官のことをちよつとだけ、お話したいと思います。何も、麻薬の話をするわけじゃございませんで、これは、ユダヤ人というのを、私、はじめで知ったんですが、これも、非常に親しくなつたせい、もう何もかも私に任す様になつたわけです。そういう様に、ミスター東条という仇名ついてるの知つて、私としゃべつてるうちに、一辺、自分の宿舎へ来てくれんかと言うことで、当時、東京会館というのございました、今でもございますが、第一生命ビルの北側にございます。東京会館、今はホテルになっておりますが、その五階か何かで、宿舎にしようとしたんですが、そこへ来てくれ言うて、何か欲しい物あったら、皆、持つて行つてくれということ、はじめ、日本人を信用してなかつたわけですけども、半年程経つたら、あなたは信用出来るから、私のすべてを預けるといふので、その部屋の鍵と引出しの鍵、全部くれるんですね。お金欲しくなつたら、ここにドルが入ってるから、自由にドル

を使ってくれと。それまでは信用してないんですが、信用しだしたら全く無防備なんです。

一番困ったのは、こんな腹、でっかいユダヤ人です。やっぱり日本人みたいなT字型のふんどし、してるわけです。それが、廻らんです。こうやろうとしても、手が届かないんですね。

それで、すっ裸になって、頼むから廻してくれ、言うわけですね。一物をブラン／＼させもってね。この越中ふんどしを前へ廻して上げて。えらい喜びましてね。自分の一つも見えないしね。余り腹が大きいものですから、手でも届かないわけです。だから越中褌、前へ引き上げられへんので。まあ、そういう位、何もかも、開けすけで、ちょっと日本人では、あそこまで出来ないと思うんですけども。も一つ、余分なことを付け加えますと、私は、一種の特権でしょうけれども、その事務所におる時に、昼、弁当は出ますけれども、退屈で、次、午後、仕事始まるまでに、毎日、銀座をジープで散歩しておりました。なぜ、ジープかと言うと、私がジープ出してくれ言うんです。アメリカの兵隊、サージェント位ですが、それがジープを運転して、あの銀座通りを行ってくれ、なるべくゆっくり行ってくれ、見たいから、と言うんですね。そうすると、ジープで後の席に一人乗って、前のアメリカ兵に運転さしてる。そうするとM・Pが飛んで来るんです。M・P、当時はほとんど、東京ではM・Pと、海軍の憲兵はS・Pというんですが、M・Pがとんで来ました。どうしてかという、アメリカの将校が、日本のお客さんと一緒に乗ってる場合は、これはお客さんとして扱うからよろしい、と。日本人が一人でアメリカの将校も連れずにア

アメリカ人のサージェントを運転手にして、ジープを使ってるのは、もつての他やというんで、M・Pが、こわい顔して、とんで来るわけです。文句あれば、スキヤップに言えと言ったわけですよ。スキヤップというのは、マッカーサーのことです。そうすると、イエス・サーというので、何も言わない。毎日の様に、M・Pにつかまりましてね。その度に、文句あるんなら、マッカーサーに言えということを言ったわけです。そうすると、そのうちに、皆、わかってしまつて、私が一人乗つて、あの時間になると銀座散歩してるナと。点領直後の話ですからね。日本人がアメリカの兵隊使つて、ジープで銀座散歩してるという、ちよつと考えられないんですけども、結構愉快でした。アメリカ人を、あごでこき使つて、毎日々々、銀座を昼の時間に散歩しとつたわけです。

まあ、そういうわけで、私は、戦後、困つた時代の日本の生活をよく知っておりますが、正反對の生活を二年程やらして頂いたのは、まあ、いいことか悪いことか、わからないです。当時の私の収入というか、給料は、はじめは軍票でドルでした。後では、円になったんですけども、二十七、八の大学卒業生にしては、破格の高い給料で、私が後から雇つたのは、皆、僕の半分位の給料を出しておりました。そんなので私は、皆さんが困つてた最中に、私は、顔を段々知られてると、東京駅で進駐軍専用車というのが来て、日本人は押し合いへし合いで、もう大変な、天井まで乗つてゐる様な状態ですが、それに乗ろうとすると、そちらに行っちゃーいかと、あなたは

こちらに乗れと言つて、無理矢理に専用車の方に引っぱり込まれて、一回だけ乗ったことがあるんです。ところが、乗ったら一つの車輛に、三人か四人、アメリカ兵が乗ってるだけで、向うは押し合いへし合い、もう、ぞつとしまして、二度と乗らんことにしました。けれども、つまらんことばかり申し上げましたが、最後に、何故、長いこともおらんつもりでおったのが、続いたのかと言いますと、自分の恩師が、始めは半年程でやめろと言つて行つたんですけれども、終いになると大学にとつても、君は大事な人間やから、もうちょっと頑張つてくれと言われて、すぐ辞めるつもりが、恩師が、逆に、頼むからおつてくれという風になりまして、それで、二年程になりました。まだ、ひよつとしたら、まだおったかもわからないんですが、何と、そのドクター・ジョンソンに、カクテルパーティの席で「どうも、お尻がおかしい」と、じゃあ、診てやろう、脱げと言うんですね、ちよつと横へ入つた部屋で、カクテルグラスを持ったまま、お尻をよく見る様にしろと言うんで、お尻、まる出しにしまして、あゝ、これは痔瘻だと言うんで、すぐ手術せないかん言つて、当時の第一国立病院（昔の陸軍病院ですけども）にほり込まれて、続けて大手術をやりました。それでG・H・Qとは縁がぎれました。はずかしい様な結末であつたわけです。流石、医者だなアと思いました。

そういう、あつけない幕切れになつたわけですが、少なくとも、高等学校を出たプライドだけは失わんと、どうやらいけたんやないかなと思つて、何とか、自分をなぐさめておるんです。国

立予防衛生研究所なんか、私が提案して作った様なものですが、後に、G・H・Q辞めてから手術がすんだ後、そこに厚生技官として勤めたりしたり、あるいは、私みたい若いのに、薬学教育審議会と言いまして薬科大学のカリキュラムを、一人にまかして作らせたりしました。それが、未だ、生きていて、今だにその影響が残っておるので驚いているので、責任が大きいなということを感じております。

ご静聴、有難うございました。

(夙川学院短期大学名誉教授)